

(様式 4)

平成 27 年度 日 立 市 教 育 研 究 会 先 進 校 等 調 査 派 遣 研 修 報 告 書

日 立 市 立 大 久 保 小 学 校 教 諭 瀬 尾 洋 一

- 1 派遣期間 平成 27 年 7 月 28 日(火)～7 月 28 日(火)
- 2 研修先 学校名(会場名) 筑波大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp>

3 研修内容

(1) これからの社会科の学習とは

小学校の社会科において、学びの成果を単純な発表会とする時代は、終わったといえる。現代社会は、多様な問題に対して、困難な解決方法を提案し実行しなければならない時代であり、日々刻々と変化する社会事象や社会問題に対して、何に価値を置き、どのような意思決定をするのか、創造的に捉えていく資質が求められているからである。そして、その資質こそが社会科が目指す公民的資質であるといえる。

筑波大附属小の社会科教育研究部では、研究テーマを「社会を考えて創る社会科学習」とし「知る・わかる」社会科から「考える・創る」社会科への転換を目指し研究・実践を進めている。

(2) 価値判断する社会科学習

これまでの社会科の学習は、社会の仕組みがわかることでまとめられてきた。しかし、これからの時代を生きる子どもたちは、判断する能力を育成することに重きを置いている。では、価値判断力を育成する学習では何が大切なのか。筑波大附属小の社会科教育研究部では、①確かな社会認識、②自分の価値判断の根拠となる調べ学習、③日常生活と関わりがある課題設定、④判断すべき問題を学級全体の問題とする「共通体験」の 4 点を授業づくりのポイントとしている。

① 確かな社会認識

価値判断の力を求める学習では、他の子どもと価値の相違に気づくところから学習が始まる。その気づきを学習の中心に位置付けることで個人の価値判断を相互行為による話し合いで社会的価値である社会認識へと発展させていくことを目指している。話し合いの中で曖昧な根拠は、事実の裏付けにはならない。事実に基づいた話し合いを構成し、価値を問うことで社会認識・価値判断を育成することができる。つまり、価値判断力を育成する学習では、社会認識を確かなものにしなければ学習として成立しない。

② 自分の価値判断の根拠となる調べ学習

他の子どもや大人の価値判断を多面的に捉えるには、自己の価値判断を文献資料やメディアを活用して調べ、見直すことが重要である。つまり、他の子どもの価値判断と交流することで自分の考えを深化・発展させ、他の考えと比較検討することを通して自分の考えをより確かなものにすることができるのである。「価値判断して、考えて、また価値判断して、考えて・・・」を繰り返すスパイラル学習を積み重ねることが社会的価値判断力・意思決定力を育成する社会科学習である。

③ 日常生活と関わりがある課題設定

社会科の学習では、どのような内容で価値判断や意思決定を迫るのか学習課題を設定することが重要になってくる。また、刻々と変化する社会事象に対して、学習対象を常に新しいものに捉え直さなければならぬ。子どもの価値判断が分かれ、興味をもちやすく、日常生活に関わりがある現代的課題を設定することが重要となってくる。価値判断には、倫理的判断(いいか、悪いか)と規範的判断(べきか、否か)の 2 種類であり、この 2 つの問いを基本として課題を設定していく。

④ 判断すべき問題を学級全体の問題とする「共通体験」

筑波大附属小が捉える「共通体験」とは、実体験だけでなく。模擬体験やビデオ学習、資料をもとにした話し合い等も含む体験としている。大切なのは、共通体験を通

して子どもが疑問や問題点に気づき、価値判断すべき問題について話し合いができることであるとしている。問題意識の共有化は、他の子どもと対話をしてみたいという動機付けも図られるからである。

(4) 実際の授業の様子

今回の授業公開の社会科では、「土用の丑の日にうなぎを食べるか？」を学習課題として設定していた。まず、2つのうなぎの写真（チェーン店の吉野家と近所の料理屋）を提示し、今年の土用の丑の日（7/24）にうなぎを食べたか、児童に問うことから学習をスタートさせていた。身近な店を取り上げることで日常生活と関わりを生み、興味をもちやすい課題設定であることが分かる。次に、価値判断すべき問題を学級全体の問題とする「共通体験」として「日本人が土用の丑の日にうなぎを食べるようになった歴史的経緯」「現在のうなぎを取り巻く問題」についてスライドを使って説明をしていた。授業では、江戸時代から続く伝統的な習慣であること、うなぎの完全養殖は、まだできないこと、養殖に必要なシラスウナギの漁獲量が減少し、そのために価格が高騰していること、ニホンうなぎは、絶滅危惧種に指定されたことなどが確認された。



次に、スライドから得た知識・情報をもとに自分の判断を決定し、理由をノートに記述していった。今回の授業では、「土用の丑の日にうなぎを食べるべきか、否か」という倫理的判断を価値判断の課題として設定していたが、子どもの考えを分類していくと「食べるべき」「食べたい」「食べたくない」「食べるべきではない」の4つに分かれた。子どもたちの価値判断の結果を明確にするため黒板にネームプレートを貼り、視覚化していた。自分の価値判断の理由を発表し、全体で交流をした後、本時を振り返り自分の考えの最終判断とした。

＜子どもから出された意見＞

「食べるべき」「食べたい」

- ・日本の伝統的食文化だから残していきたい。
- ・年に1度のことだから楽しんでもいいのではないかな。
- ・絶滅危惧種でもたくさん食べなければ大丈夫だ。

「食べるべきではない」「食べたくない」

- ・絶滅危惧種をわざわざ食べる必要はない。
- ・他にも魚はたくさん種類がある。
- ・今、我慢をすれば数が回復する。
- ・養殖技術が確立されるまで我慢するべきだ。



4 感想

今回の授業公開を参観して筑波大附属小社会科研究部の考える社会科を象徴する言葉が、「生きて働く力」を育てるである。そのための社会科の授業改善の視点として同校では「覚えて答える」社会科から「解って考える」社会科への転換としている。社会科の学習する対象は、広く社会そのものである。子どもたちに価値判断力や意思決定力を育成するためには、判断すべき課題設定が重要であると改めて感じた。教科書の学習課題であってもその価値判断に葛藤する場面を設定することで、子どもたちの「調べる」「考える」「交流する」「まとめる」活動に必要感・必然性が生まれる。全国学力・学習状況調査のB問題で扱われるように立場にもとづき考えの根拠を明確にして述べる力は、正に社会科の中で活かされるべきだと考えた。なぜなら、21世紀型の学力が求めているのは、困難な問題の解決方法を考え出し、立場の異なる相手と折り合いをつけ、より良く解決する資質だからである。公開授業ということで、子どもたちの考えだけで十分交流できた学習だったかということ、うなぎだけでなく鰯（ハタハタ）など過去に資源量が激減して現在回復した事例などをもとに、思考の揺さぶりが無かったことなど、不十分な点もあったが自分の目指す「考える社会科」について大いに考えさせられた。